Ⅴ　瓦礫撤去

３．１１以降１年以上経った、４月 16 日、ようやく、立ち入りが解除になった「20ｋｍ警戒区域」。４月 30 日、急遽、「南相馬」福島市のボランティアから２日前の急な依頼にもかかわらず、９名の参加者。作業は、津波で家や庭の被害があったまま、の川の堤防沿いの集落での、片付け作業。地元消防団や、首都圏や名古屋からの若者のボランティア数組３０人とともに、庭の枯れ草撤去や、側溝の泥撤去、など軽度な作業を担当。２軒の作業が一段落したところで、「墓」掃除。その後、相馬市で夕食。深夜の帰宅だった。

【当時のレポート】

昨日、早朝から９名の方々が、茨城、千葉、埼玉、東京、神奈川から５台の車両に分乗、参加頂きました。（男性７名、女性２名）

① ２日前、しかも、ゴールデンウイークが始まった初日朝、の急で、

② 早朝出発、深夜帰宅の日帰り強行軍で、

③ 中高年にはキツイ、初の肉体労働で、

④ 放射能汚染地域で、　　のお願いにも関わらず、です。

まずは、参加者の皆様、改めて、本当にお疲れさまでした。

初体験だらけの一日、を簡単に報告します。

１　参加者

南相馬市の地元の消防団達に加え、三河、千葉、品川、所沢、静岡ナンバーなどの車に分乗した 30 歳前後の男性主体の数グループに、加わりました。ゴールデンウイークも３日目。高速道路のひどい渋滞は無かったものの、南相馬市へ入るルートは、東北道からの半数は、ほぼカーナビ通りで、迷わず。しかし、常磐道から来た半数は、原発周辺の立ち入り禁止、通行禁止、で、右往左往。一部の方は、自宅を出てから現場まで、８時間かかり、既に疲労困憊ぎみ。

２　作業場所

一般人の立ち入りを禁止した２０ｋｍ警戒区域の中で、南相馬市の一部が、２週間前の４月１６

日より立ち入り解除されたのを機に、今回は、一見、人が住んでいるかのような、川に面し、後ろが山の、のどかな、８世帯の集落に行きました。どの家も、敷地が３００坪程度はあり、母屋、離れ、車庫など大きな家屋が分散、一部は蔵もあり、また、母屋の入口だけで仮設住宅の２部屋分もある、先祖伝来の土地。様々な木々や花が埋められた庭も立派。河口からは１ｋｍ内陸で、普段は数mの幅しかない、小川のような太田川沿い。
３１１では、高い堤防堤が一部決壊、集落と堤の間の墓や田んぼを超え、庭や一部の家屋の１階部分まで津波が浸水しましたが、山陰の集落であったことが幸いし、川の対面する集落が丸ごと呑まれたのに比べ、死者も無し。しかし、放射能汚染の警戒区域で、これまで、ボランティアの立ち入りも出来ず、また、今回の立ち入り解禁後の現在も、住民たちは、暮らすことが出来ず、集落全員、鹿島区の同じ仮設住宅暮らし。

３　我々メンバーの作業内容

我々９人は、そのうち、分散して２世帯に入り、庭の枯れ草や雑草、土砂に埋まった側溝の掘り起こし、など、自宅の「主人（あるじ）」とともに清掃作業をしました。

（1）Ｋさん宅（午前９時～１０時半）

最初の家は、６０歳前後の男性の一人暮らし宅。（子供は独立し、相馬市で飲食店をやっている。）津波は、やや高台の敷地の入口までで止まり、主として、３０坪ほどの庭や、通路の枯れ草、雑草取りのみ。仙台の建設会社で、福島第１原発施設や石巻護岸工事などに携わり、会社も解散、現在は無職。高血圧と糖尿病で、仮設暮らしは病院通院がしやすい部屋をあてがわれているが、自宅に戻る目処もなく、将来が見えず、毎日不安、とのこと。それでも、我々に、「アイスキャンデー」「菓子パン」の差し入れも頂き、感謝される。

（2）Ｏさん宅（午前１０時半～午後３時）

我々のメンバーの大半は、こちらへ順次移動。上記 K さんと親戚の、５０代女性の一人暮らし宅。（子供たちは、独立。）母屋は浸水は免れたが、車庫兼息子さんの部屋の離れは、被災。シャッターが、地上から数十センチ曲がり、開閉不能で、車も出せず。５０坪以上の「自慢の日本庭園」も、塩害で松、など相当数の樹木や草花は枯れ、それでも、梅、桃や水仙、などは花開く。裏山まで津波が到達し、側溝や庭園、通路などの土砂さらい、枯れ草・雑草取り、などを十数人の中で、昼食を挟んで、黙々と作業。明るく、元気な O さんは我々のメンバーとも、作業中、ざっくばらんな雑談。「相当お金と時間をかけ、手入れしてきたのに被災。一年間放置して来て、荒れ放題だったのが、こんなに綺麗になって有難い。でも、放射能は本当に憎い。この地域は、東電とは無関係だったのに、戻れるアテもないのが、辛い。これまで水道もいらず、山の水を使っていて、農作物も自家用ぐらいは作り、魚も友人・親戚などから頂く生活。それが、今は、仮設で、料理や飲料用はペットボトルを買い、風呂用の水道料は払い、食べ物は全て買うしかない。毎日が厳しい。」

（３）墓の清掃（午後３時～４時半）

この集落の拠り所、堤防近くにある墓地は、津波で、ほぼ全壊。雑草が生い茂り、先祖の墓参りもままならぬ状況。ひたすら１００坪程度の墓地で、雑草、枯れ草取り。その中で、我々のメンバーが、「骨」を発見。大腿骨の一部？少なくとも、墓地は、埋葬さてれいた骨壷などは露出しておらず、人骨、または犬などの哺乳類のものと推定。そのまま、とりあえずは、人目にわかる場所に置いておくことに。ここで、時間切れで、作業終了。解散。

４　作業終了後

（１）　「南相馬道の駅」で「土産の買い物」（午後５時～５時半）

作業現場では、トイレ、水もなく、道の駅で、洗面、靴の履き替えなどとともに、地元へお金をわずかでも落とす、買い物。

（２）　海岸線経由

南相馬市の海岸線へ向かう。これまで、山元町から気仙沼までの宮城県での津波被災地域とはまた異なる風景がそこにありました。広大な平原と化し、そちらこちらに、ピンクのリボンと、献花。中でも目立つ「大きな鯉のぼり」。下には、ここで５人が亡くなり、残った２人を見守って、の手書きの板。手を合わせました。

（３）相馬市「モココちゃんのレストラン」で夕食（午後６時～７時半）

海岸近くで、床上浸水し、８月営業再開、お知らせしたように、今年、プレゼントしたお雛様

が飾られていた「無国籍料理」レストラン。NHK「２１人の輪」に登場する磯部小学校のクラスメイトのひとり、「鎌田百子」ちゃんの両親が地元客相手に、２０年近く。今回は、「営業休業日」だったのを、我々だけの為に、開けてくれ、特別待遇。東京に１店しか作っていない「緑色の素材」を使ったピザ、２種類のスパイスのみで作ったルーとは肉や野菜は別に煮込んだ、メニューには無い２種類のカレー、そして一頭から１ｋｇしかとれない部位のみで、パン粉は使わない肉１００％の煮込みハンバーグ。食前のオレンジジュース、食後のアップルパイ、チーズケーキも、手作り。コーヒーも苦味なく、以上が、全て「東京の高級レストランで２１年修業」のご主人の力作。用事で道の駅で別れた２人を除く７人は、疲れも吹っ飛び、大満足。ご主人は、「これまでのお客だった、この地域の住民は、まだ戻ってこないし、若い人は出て行くばかり。夜は、目の前の住宅街も、真っ暗となり、車は全く通らない。毎日がその日暮らしで、いつまでレストランを続けられるか、展望も自信もない。放射能汚染は、むしろこれからが心配。食材も、北海道産などで、福島産は使えない。農作物もだが、海の汚染が続き、仙台方面の魚も今後危ない。子供たちへの影響も本当に心配。仮設住宅の部屋に入るたびに、精気を失わせ、気が滅入り、ため息の毎日。何も解決もせず、復興・復旧などと言うことを聞くたび、とんでもない、と思う。８９歳の寝たきりの母親も、介護施設で預かってもらえるのが９月まで。仮設に戻されたら、もうレストランは無理。皆さんの、このような来店で、忘れられていないんだ、と、本当に勇気づけられる。有難い。」

（４）　帰宅

帰りは、ほぼ東北道で、GWの渋滞もなく、ほぼ午前１２時半～１時半程度に無事帰宅。

≪　感想　≫

・暑い日ではなかったが、やはり作業するとともに、汗ばむ。マスクでメガネがくもり、履き慣れない長靴が重い。でも、今回の参加者宛の前日夜の案内（下記）で触れた。新聞記事から受け売りの服装、はやはり、基本的に必須でした。

・　主催のリーダーたちは、南相馬に集中して昨年３月より１年間、継続して首都圏などから足を運ぶベテラン。持参したシャベル、鍬、鋤、熊手、ほうき、なども、用意周到。餅屋は餅屋。我々中高年組への配慮で、軽労働の枯れ草集め、雑草取りなどの現場へ回してくれましたが、２０代、３０代主体のメンバーの一部は、草刈機数台で、雑草狩りなどや上記「力仕事」。我々の作業していた隣の家は、床上浸水し、膨大な家具や畳、などの搬出、も加わり、大掛かり。なにより、線量の高いことを承知の地域で、ホコリが舞う枯れ草や側溝の泥のかき出し、などを黙々とやり続ける若者たちと、それを有難く感謝する被災者達。でも、解除された警戒区域も広域で、まだまだ、この地道な作業が続けられるようです。

・これまでの宮城県亘理での支援物資配布や、今年の仮設での歌謡曲合唱、などとは全く違う支援スタイル。今後も、是々非々でやれる範囲で協力出来たら、とは思いましたが、やはり我々の出来る支援は、「物資配布」と「心のケア」（それに現地へのお金落とし）。

まずは、５月２０～２２日の福島、宮城の仮設住宅での合唱伴奏や、物資配布、などを積み上げることが最優先、という方向も、改めて確認出来たように思います。